
Crocodile dream

uko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Crocodile dream

【Zコード】

Z8698C

【作者名】

uko

【あらすじ】

アイドルに自分の人生を預けた25歳の女。自分の人生に真っ直ぐに向き合えない彼女を取り巻く人間にはそれぞれに同じ様に逃げ出したいくらいの現実がある。『彼の全てを見つめるんだ、愛することとはよく見ることだと思うから。』

透明なクロコダイルが私を甘く噛む

苦しみの中であたしゃたりやかな夢を見る

1 - s a t o k o -

「まひ、やつぱり朝が来た。」

この世は誰もに均等に残酷だ。
そういうもんだ。

薄いクリーム色のシーツから滑り起きる。

「早くしなきや

色々なこと、早くしなきや。

朝食は紙パックのフルツオレとお徳用のスナックパン。
美味くも不味くも無い。
グラスも皿も使わない。
だって洗うのが面倒だから。

「紙パックは資源」のみ、ストローは燃えない」。。。「胃に流し込んだら、シャワーを浴びる。休む暇なく。

「早くしなきや」

時間が無いわけじゃない。
でも時間に追われるといつも救われる。

一息つべと一瞬で嫌になるから、今日とこづか一日が。

シャワーを浴びると寒々とする季節が来た、と毎つ。
シャンプーの匂いが漂つ髪の毛を手早く乾かして、
下着姿のままベッドに座り込んで化粧をする。
滑らかなシーツは気持ち良い。

あたしには恥ずかしい朝の陽よしおとづれと気持ちよい。

「・・・早くしなきや」

あの人は純白の白い下着が好きらしいから。

清純なイメージなのだろうか？

男も女のように妄想しているのだろうか？

そうだとしたら、人間は性別に関係なくすべての人間が妄想にふけつてになることになる。

みんな現実逃避しているのにどうして、この世に生きる意味があるのだろう。

化粧はナチュラルメイクを心掛けている。

あの人はそれが好みらしいから。

ナチュラルメイクっていうのはしつかりメイクをするよりずっと手が掛かると思う。

白い下着しか履かずにナチュラルメイクをする女に、清純なやつなんていないとと思う。

化粧が済んだらすぐにその辺にある服を着る。

あの人は服装にはこだわらないらしいから、なんだつていい。

スカートを履く。

大抵の男性はスカートが好きだから、

あの人もそうだといい。

男は脚が好きなんだ。

少しくらい太くたって、脚が好きなんだ。

生脚ならなおい。

いろいろなことが理にかなつてない。

でもそういうもんだ。

隣の女は昨日の夜もまた男と楽しそうに笑つていた。
週に2度必ず男を連れ込む。
火曜と金曜の夜。

不倫じやないかと睨んでいる。
男は汗臭い不細工なオヤジ、
だつたらいいなと思う。

それにしたつてきつと話し上手な男なんだろう。
じゃないとあんなにあつけらかんとは笑えない。
週に2度、壁越しの彼女は幸せそうだ。

でも隣の女は他の週5日は幸せには程遠く憂鬱に過ぎじしているんだ

うつと、

あたしは信じている。

ガチャン・・・

鈍い音をたてて鍵が閉まる。

駅まであの人の優しい声を聴こいつ。

耳の奥で響く色のある声色が、ひねくれたあたしの全てを溶かしてくれる。

つまらないあたしの人生をあの人があ救い出してくれる。

破滅的につまらない仕事だと思つ。

ただ、仕事をしないとあの人には会えないから。

その為になんの価値もない時間を1日8時間も過げしている。
価値を見いだせないのは私自身なんだけど。

誤字脱字だけに注意をはらつて、あとは無心にキーボードを叩く。

その内に足が溶けて床と一体化してしまつんぢやないかと思つ。

まだ子供だつた頃、横断歩道の白線を踏み外すと大きな口を開いたワニに内臓がズタズタになるまでかみ砕かれる信じていたように、

このオフィスにも透明なワニが居ると本氣でそう思つ。

だからヒールのかかとは床に着けたらいけない。

ワニの歯は鋭い。

ガブリだ。

ガブリ「コココリだ。

・・・ワニ吉さん、私の内臓の歯ごたえはいかがですか？

人間のほとんどは水分みたいだから、

去年の社員旅行で泊まつた旅館の夕食で出た白子の天ぷらくらいかな？

「・・・はああ」

そういうグロテスクな妄想を膨らませてゐる大概は誤字脱字をする。

人間は反省する生き物だ。

「一吉とせしばりべ距離を置け。

もう大人なんだから。

他人によく言われる」と自分にも言ってみる。

「サト「ちやん、コーヒー入れて。」

一吉と決別した私に篠原さんが声をかける。

「はい。」

・・・篠原め。

いやいや、お茶でもコーヒーでも入れますよ。

どうしてことない。

ひとつそり秘密の白子を入れてあげよう、篠原さん。

かかとを着けても一吉は冷たい床の中で眠つたままだ。

熱帯地域に生息するあんたがこんな冷たい床で生きてるなんて。
あなたの根性には圧巻だよ。

どうしたら謙虚に逞しく、現実を生きれるのか、あたしに教えてよ
一吉。

五時になつたらマッハで帰る。

マッハだ！

マッハつてどの位の速さなんだか知らないけど、とにかくマッハなんだ。

マッハ！

会社から出たらあの人声を聴く。

少し汗ばむくらいの早歩きでいつものスーパーへ向づ。

今日はレトルトカレーを買う。

一番安いやつ。

それもあの人と会う為。

そう思うとなんて人生は素敵なんだろうと思つ。

ああ、人生は素敵。

福神漬けに手を伸ばそうとした自分を強く叱つて家に帰る。

贅沢は敵だ！

家に帰つたら、シャワーを浴びる。

パソコンを起動する。

洗濯機を回して、お湯を沸かす。

そしたら今日初めて一息つくんだ。

世の中の大抵の男は煙草を吸う女を嫌うだらうけど、いや、あの人はきっと嫌うだらう。

それでも煙草だけは止められない。

仕事も外食も福神漬けも夜遊びも贅沢も恋人も我慢するからそれだけは許してね。

そんなあなたは最低な女だと思つ。

それでも仕事が終わった後のメンソールの煙草は死んでもいいくらい気持ち良い。

パソコンが起きた。

おはよう、心の友よ。

遅く起きるのって最高だよね、もう午後8時だけど。

あと一時間後にはあの人に会える。
素晴らしい時間。

地デジは最高だ。

何たつて画質がいい。

地デジってなんのことだかよく知らないけど。

録画はリアルタイムで行う。

無駄なテレビCMをカットするんだ。

あの人にはシンプルっていう言葉がよく似合つ。

無駄なものはいらないんだ。

あの人への美しさにテレビCMはいらない。

ま、私の自己満足だけど。

後47分25秒での人に会える。

手が汗ばむ。顔がにやける。

人生は素敵だ。

これは恋だと思つ。

誰がなんと言おうと恋だと思つ。

そして恋からは愛が芽生えると信じている。

そう信じている

「お湯。お湯・・・」

レトルトカレーだ。甘口だ。

人生は素敵だ。

レトルトカレーは美味しいから、
やっぱり人生は素敵だ。

15分前から液晶テレビの前に座り込む。
洗い物は済ませてしまおう。

でも手がカレー臭い女はあの人が嫌うだろうか？

嫌うだろう？…手がカレー臭い女を好む男がいるわけがない。

でも人間の姓癖って簡単に常識を越えるからな・・・
家庭的と言えば家庭的のような気もする。
というかあの人はカレーは好きだろうか？

カレーが嫌いな人間なんかいるのだろうか？

しかし決めつけてはならない。

彼の全てを見つめるんだ。

愛することはよく見ることだと思うから。

よし、後でネットで調べてみよう。

9時から、あの人の出る歌番組が始まる。

私はその為に生きているんだ。

人生は素敵だ

ג'נ'ע<

一度落ちたら逃れられない

クロコダイルの住み着くその穴に

2 - s i n o h a r a -

生意気な女は可愛い 彼女を見ていると思つ。

そりや顔は美樹ちゃんのが可愛いし

高丸さんの方がずっと感じが良い

高丸さんは相槌の打ち方が丁寧だし 清潔感がある

それだと思うと彼女は実に愛想が悪い。

顔だつて並だ

髪の毛は肩で揃えただけの何てこと無いスタイルだし

化粧も素つ氣無い

しかし 彼女はふちの無い眼鏡が良く似合つ。

彼女はいつも元気じゃない
僕らの知らない別のどこかにいる

そのどこも見ていないような瞳は
美樹ちゃんの整った顔立ちや
高丸さんのかきらめく爪よりも

ずっと美しいと思つ。

「サトウちゃん、コーヒー入れて。」

声をかけた

いつもコーヒーは彼女に頼む

大概のことは無視されるが コーヒーだけは入れてもらえる

といつも霧岡氣を出すのがコジだ。
出来るだけ
たまたま側にいたからお願いしちゃお

「はい。」

なんて無愛想な返事なんだ

天才的だ。

しかも

彼女の入れたコーヒーは素晴らしい不味い

コーヒーの薄さが彼女の僕への興味の無さを物語ついている

嗚呼不味い 今日も不味い

きっと今日も5時3分前から小さな声でカウントダウンして
5時を回つたら小走りで帰るんだろうね・・・

もしタイムカードを押し忘れたら、
こつそり押してあげるからね。

< > U U >

3 - hikaru -

クロコダイルの皮を剥ぎ

特製の毛皮を着せてあげよう

そして誰にも見つからない場所へ逃げるんだ

3 - hikaru -

黄色い歓声

馬鹿みたいに眩しい照明

ピエロの様に派手な衣装

眩暈がする

眩暈がするんだ

いつの間にか見失つてしまつた

自分はもつと上手に生きていける部類の人間だと思っていた。
でもそれは大きな間違いで

今、

今俺は、

何もやる気が起きない。

朝から晩まで、

いくつかの決められた人間と
いくつかの決められた場所で
いくつかの決められた仕事をする。
それはとても、息苦しい。

浩一郎がまたスタッフを怒鳴りつけている。

用意された衣装が気に入らないらしい。

確かにセンスの欠片もない。

真っ赤な生地に大量のスパンコールで飾られている。

何だよこれ

ああ、そうだ。

子供の頃、祥子さんの黒いピアノ鍵盤の上にあつた、
あの赤い長いフェルト。

あの色によく似ている。

鍵盤に悪戯しようと冷たく硬いイスによじ登った。

勢いよく俺に手の上に鍵盤の蓋が落ちてきた。

それはとても重く、小さな子供の掌に圧し掛かった。

どのくらいこの程度の怪我で、

どのくらい自分が泣いたのかは忘れてしまった。

ただ運ばれた病院の薬品臭い廊下や、

看護婦さんの冷たくて気持ちのいい指先は覚えている。

白と黒の鍵盤の上に生暖かい真っ赤な血が流れ出る
鍵盤と鍵盤の間に染み入る

人間の血はクレヨンの赤よりずっと濁っている

子供ながらにガッカリした。

そうだ。

人間の内部にはどす黒い血液が流れてる。

もつ沢山だと思つ

何もしたくない

それでも9時には歌番組の生放送があるし、
きっとそれを投げ出す勇気も氣力も無い。

今年で27歳になる、いい歳をした浩一郎と俺が、
カメラに向つて爽やかな笑顔を見せるんだ。
反吐が出るくらいの爽やかな笑顔。

ピエロになる。

殺す価値など無い心を殺して。

あの日、

ピアノの鍵盤の蓋を落としたのは祥子さんだった。

へへへ(笑)

4 - s a t o k o 2 -

4 - s a t o k o 2 -

今日のあの人も今までのどんな人のより素敵だった。

あの人の魅力で完全にドライアイだ。
シバシバシバシバする。
目が、

あの人は誰の物でもない、
もちろんあたしの物でも。
あの人は嘘をつかない、
絶対に恋人はない。
あの人は歳をとらない、
・・・いや、とる。
だから余計に美しいんだ。

散々選んで買つても、切り花は枯れてしまう
素晴らしい映画も、エンドロールは必ず流れる

何度も繰り返し呼んだ小説も、何度読んでも必ず最後のページが現われる

大好きだった鈴木くんも、別の女と結婚した

でも、失くなるから

失つたから私はそれらを愛しいと思えたんだ

それでも彼の嘘偽りの無い爽やかな笑顔に勝る美しいモノは無い

いつかあの人も死んでしまうだろうか？

そのときは後を追おうと決めている。

あたしは悲しい女だろうか？

それは考えないことに決めている。

とにかくあの人素晴らしい瞬間を残しておくんだ。

テレビCMはカットしてね。

みんなが忘れても 私は忘れないように

ねえ、ワニ一吉？

あたしは夢に溺れているわけじゃないの

毎日毎日決意してる。

明日にはきちんと自分の人生に向かい合おうとして。

その人の人生とあたし人生とは別物だつてこと

でもお願ひ、

もうすこしだけ
もうすこしだけ
うまく出来ないあたしを見逃して。

ただ
ただ

あの人気が好き

あの人気が好きなの。

それだけは信じて。

乾いた目に煙が沁みた

^ ^ ^ ^ ^

クロコダイルの八重歯は可愛い

可愛いくて可愛い　この手で壊してしまいたい

5 - s y o k o -

隣の女は浮ついている
そう思ひ。

何度も出かけるといふを窓の外に見つけた。

25歳くらいかな、

素っ気無い顔つきにふちの無い眼鏡をかけている。
いつも清潔そうな恰好をしている。

見かけるときはいつも小走り。

いつも同じ時間に出掛け、いつも同じ時間に帰ってくる。
気が知れない。

でも結局男は「いつこう女が好きなんだよ。

でもこの女に絶対男はいない

毎日同じ時間に小走りで帰つてくる女に男がいるわけがない。

p.i p.i p.i p.i p.i p.i p.i p.i

• • •

必ず火曜の朝には年の離れた弟から電話がかかってくる。

美は10代の頃からテレビに出てる。

若い女の口は聞くたまに笑顔を拭いて身を和く京を私は心底軽蔑している。

p
i

何上

・・・祥子さん?...おまえ?」

「何の用?」

『いや……どうしてるかなって。ちゃんとソラ飯食べんの?』

「そんなのあんたに関係ないじゃない。」

『・・・そろかもしれないけど、』

「食べてる。」

『良かつた・・・仕事は?』

「してるわよ。」

『・・・そうだよね。』

「あんたみたいに稼ぎが良くないから、働かないと暮らしていくらいの。分かる?」

『・・・うん。ごめん。』

「謝らないで、余計惨めになる。」

『でも・・・祥子さんの仕事だつて素敵な仕事だと思つ。』

「お遊びみたいな仕事してる人間に何が分かるわけ?」

『・・・』

「じゃあね。」

『祥子さんーあの・・・明日の夜9時に歌番組に出るから。』

「・・・」

『もし時間があつたら・・・見て、下さい。』

p.i

「・・・」

仕事は点字点訳師をしている。

弟と違い、働いても働いても満足な収入は無い。
一日中この狭い部屋に居なきやいけないのも苦痛だ。

私の生きている世界は 息が詰まる程狭い水槽

母は素直に弟からの仕送りを受け取れと言つ。
他人に配る程稼いでるんだ。

赤の他人に。

私はホームレスになつたつて弟の援助は受けない。
受けるもんか。

弟の仕事が気に入らないんじゃない。

金は欲しい。

でも私はあいつが死ぬほど嫌いなんだ。

でも、電話がかかってきたということは今日は火曜日だ。

火曜日といふことは彼がやつてくれる。

「掃除・・・」

机に上は原稿で埋まっていた。
床にも数枚落ちている。

飲んだまま置きっぱなしになつていてるコーヒーカップが4つも溜まつてる。

灰皿には山盛りの吸殻。

ベットの上には脱ぎっぱなしの洋服。

「洗わなきや・・・掃除機・・・洗濯も」

まだ彼が来るまで丸一日時間がある。

落ち着いた。

まずは煙草を吸おう。
やうじよう。

「ふうー・・・」

あの貴重面に毎日洗濯している隣の女がこの部屋を見たらどう思う
だろう?

でもどんなに熱心に掃除したって、我が家のおキブリがそつち行く
んだよ。

バー力 バー力

「…………」

掃除が済んだら近くのスーパーへ行こう。
彼が好きなちくわぶの煮物を作ろう。

^ ^ ^ ^ ^

6 - s i n o h a r a 2 -

17時に出た彼女が、21時に戻つて來た。

驚いた

自分の胸が予想以上に揺さぶられたことに。

残業は嫌いだ

ピーマンの次に嫌いだ

でも1人のオフィスは好きだ

熱帯夜のビアガーデン程じゃないけど

このオフィスの床は薄いブルーにグリーンが混ざってる。
アマゾンの池みたいだ、なんて。

彼女はいつになく焦っていた。

行き切らしながらオフィスに入ってきた彼女は、
上下ジャージ姿だった。

テープピンクの。

刺激が強すぎる

いろんな意味で。

熱心に残業していた僕のことはまるで無視して、自分の机をかき回
している。

「・・・忘れもの？」

彼女に僕の言葉が届くわけがない。

ここまでこの恰好で来たのか？

タクシー？

まさか電車じゃないだろうし・・・

というかそこまで大事なものを忘れたのか？

・・・なんだろ？

サイフ？

部屋の鍵！

いや、ジャージに着替えてるんだからそれはないな？

・・・ん？

いやいや、まさか。

・・・まさかな。

・・・でも

「あの・・・サト「けやん？」

ガサガサガサガサ・・・ガタン！

「・・・・・」

ガタ！

「もしかして携帯電話探してる？」

ガサ・・・・・

「いや・・・・あの、ノニー機の上に置いてあつたんだけど。待ち受けがさ、「

「みーー？」

「え？」

「・・・・・見たんですか？」

「え・・・・ヒー」

「見たんですね？」

「み、てないです。」

「嘘ー今待ち受けって！」

「いやーあのー・・・・待ち受けって誰も取りに戻つてこないから預かっておこうかなあ？で。」

「・・・・・」

「・・・

「・・・

彼女は泣きそうな顔をして俺を睨んだ。

「」P一一機の前で、作り物のような笑顔の男と目があった。

その携帯の待ち受け画像は、

美樹ちゃんがカッコイイと騒いでいたアイドルの写真。

好きなのかな？

^ ^ ^ ^ ^

7 - s a t o k o 3 -

7 - s a t o k o 3 -

インターネットは便利だ。

今は人の呪い方を調べている。

その前は人の記憶の消し方。

いまいち具体的な方法が見つからなくて、いつも呪うことにした。

篠原さんを呪つたところで事態は何も変わらない。

分かつてるよ

分かつてる

分かつてるつてば

今日はレトルトのハンバーグ
冷めない内にとろけるチーズを乗せるんだ。

そうすると、どうなる。

なんて適切なネーミングだらうー。

今日の日記に書こう。

今日は土曜日なのに、隣の家に人がきてる。

きっと不倫オヤジじゃない。

笑い声が聞こえないから。

大抵家にいる気がする。

いつも5センチくらい窓が開いてて、グレーのカーテンがはみ出でる。

一度だけ「ゴミだしをしてる後ろ姿を見た。

鶏ガラみたいに細かつた。

「飯ちゃん」と食べてるのかな?

36歳ぐら~い?

仕事は何してるんだろ?・・・

風俗で働いていてもおかしくない風貌だつたけど、いつも隣の部屋は朝方になつても光が漏れている。

そんな時間まで家で仕事してるんだとしたら…内職?

まさか、

生活出来るはずない。

あ、でも不倫オヤジから小遣いももらってるのか？

でも小遣いくれるようなオヤジだったらこんな狭いマンションに住まないか…

それには何となくあの後ろ姿には男に頼つて生きていらるような女々しさは無かった。

会社の美樹ちゃんや高丸さんには無い、
女の哀愁？

そんなのを感じた。

女は女に敏感なんだ

そういうもんだ。

と云ふことは…

漫画家とか？

いや、まさか。
アルバイトだつてしてない様子だから、それだけで暮らせるわけがない。

売れない漫画家・・・

実家が金持ちとか。

30過ぎてまだ親から仕送りもらいつて…

漫画… 血能漫画？

血能漫画なんてジャンルあるの？

Hロ漫画でいや。

Hロ漫画家だ。

そうだ。

毎日毎日狭い部屋でHロに漫画描いてるんだ。

大変だろ？ なあ…

気が変にならないのかな？

女は男と違つていつでも性欲が溢れ出てるわけじゃないんだし。
そこを絞り出すわけね、仕事だもんね。

男の性欲がかけ流し式の温泉なら、女は循環式…

全然うまくない、あたし。

大変な仕事だね、
工口漫画家さん。

そりゃ不倫もするよ…

つて、まさかそれも仕事の一貫！？

…それでも

それでもあたしが何の価値も見い出せない仕事より、ずっと素敵だ
ね。

あたしは25歳になつてもアイドルに夢中な自分が嫌いなんじゃな
いの。

美樹ちゃんみたいに男に媚びて高い服で自分を飾つたり、

高丸さんみたいに愛想ふりまいといて裏で陰口叩くような女には絶対なりたくない。

でもどこかで、

そういうみんなに軽蔑されたくなくて、

独りになるのが恐くて、

胸張つてあの人気が好きだつて言えない中途半端な自分が嫌いなの。

独りになる覚悟もないのに 人を愛せるわけがない

待ち受け画面の彼は最高に素敵だ。

逃げ出したのは弱い自分を見たくなかつたから。

本当に呪いたいのは
あたし自身

今度生まれ変わったら

とろけるチーズになりたい

熱いハンバーグの上でとろけたら

みんなが喜んでくれるから

^ ^ ^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8698c/>

Crocodile dream

2010年11月10日10時52分発行